『チェルノブイリの祈り 未来の物語』
スベトラーナ・アレクシエービッチ／松本妙子訳
岩波書店／岩波現代文庫

本　　館	請求記号：X/080/I95S/225	資料ID：701222671
神田分館	(単行本)請求記号： /986/A41	資料ID：106522295

国際コミュニケーション学部教授　土屋 昌明

今から38年前の４月、旧ソ連ウクライナ共和国の北辺にあるチェルノブイリ原発で、原子炉がコントロールできなくなって暴走、大爆発を起こした。原子炉に穴があき、内部の放射性物質が露出した。高濃度の放射能に汚染された環境で生存できる人間はいない。しかし、火災の鎮圧、汚染除去、石棺建設といった事故処理作業に大量の作業員が動員された。その数は60～80万人だとされる。この人たちは、放射能下で働くことを知っていたのだろうか。そもそも放射能の危険性を知っていたのだろうか。そして、その後どうなったのだろうか。原子力をめぐる国家行政の恐るべき秘密主義。1997年に書かれた本書を読めば知ることができる。事故翌日に、原発に隣接する町の住民４万5000人が避難し、約1週間後に周辺30km圏から９万人が避難した。「避難させてくれてありがとう」となるか、考えてほしい。生活を根こそぎ奪われるとはどういうことなのか、本書を読めば理解できる。

その後も驚くべき事象が続出している。人類の辞書から「教訓」という語はなくなった。原発の大事故は日本でも発生し、人びとは生活を根こそぎ奪われた。今やチェルノブイリがあるウクライナでは、なんと重火器による戦争だ。そして日本の原発の町で、またもや大地震が発生した。原発は危険だからこそウソで固められている。原発事故の悲劇から私たちは何を考えるべきか、本書は深い感動とともに教えてくれる。